岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

<抄録>発症後早期に自然治癒した脊髄硬膜外血腫の1例(第71回岐阜県整形外科集談会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 暁, 児玉, 直樹, 小林, 源博, 池端, 達也, 中川, 裕章, 丹羽, 康則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12107

むように存在し，屈筋腱鞘も黄色調の変性所見を認めた。腫瘤遠位は手根間内に入りこんでおりこれによる正中神経圧迫の所見を認めた。切除組織の術後病理所見にて非乾酪壊死性類上皮結節を認めた。以上よりサルコイドーシス性腱鞘炎の診断となり，サルコイドーシス性腱鞘炎に対して術後経過観察のみであるが現在術後2カ月にて局所の再発は認めていない。

9．反復性肩関節脱臼に対する肩関節鏡視下 Bankart 修復術

松波総合病院・整形外科
若原和彦，上村修一，小原　明
同・リハビリテーション科
満尾由美子
つちや整形外科
土屋昭義
さとう整形外科
佐藤真司

当院では，平成11年より反復性肩関節脱臼に対して，肩関節鏡視下 Bankart 修復術を施行し，良好な成績を得ているので報告する。男性5例女性1例の6症例，平均年齢は27歳。平均脱臼回数は7回，関節鏡下分類は，米田の関節鏡鏡下分類で評価し，Type 1が3例，type 2が2例，type 4が1例であった。手術は全身麻酔下側臥位として，肩は外転位にて行い，後肩より鏡視，mitekGIIアンカーを前方関節窩に打ち込み，Bankart lesion の修復を行っている。手術時間は，平均3時間13分，出血量は，少量であった。手術後経過は良好で，全例において，JOA 不安定性肩関節判定基準の改善を認め，術前平均75点が，術後平均96点まで改善した。また再脱臼，脱臼傾向を認めていなく，造影 CT において関節包の縮小を認める。MitekGIIアンカーを用いた鏡視下 Bankart 修復術は，低進襲で合併症が少ないとされており，当院においても良好な結果を得ており，反復性肩関節脱臼に対して有効な治療である。

10. 発症後早期に自然治癒した脊髄硬膜外血腫の1例

下呂温泉病院・整形外科
日置　暁，児玉直樹，小林源博，池端達也，
中川裕章
小坂町国民保険診療所
丹羽康則

症例は72歳男性。主訴は腹痛，腰背部痛である。

平成14年3月27日，16時頃，腰痛，腹痛を発症。19時30分頃，突然両下肢麻痺を発症。整形外科受診となる。

両下肢に重度の知覚障害を認め，大腿四頭筋に軽度筋収縮を認めるのみでほぼ完全麻痺であった。また膀胱直腸障害を合併していた。臨床症状，MRI 所見より急性硬膜外血腫と考え，緊急手術の準備を開始した。22時，麻痺の改善を認めたため，止血剤，ステロイドを点滴静注し，経過観察とした。翌朝8時には麻痺はさらに改善を認め，両下肢筋力はほぼ正常，右母趾に8程度の知覚鈍麻を残すのみであった。

発症後3週，MRI にて血腫は完全に消失しており，麻痺も完全に回復を認めた。現在，臨床症状は全く認めず，発症前と同等の生活が可能である。

早期に麻痺回復傾向を認める症例では，手術準備をすすめた上での注意深い経過観察により保存療法を選択する余地があると思われた。

11. 小児の環軸椎回旋位固定難治例（3例）の治療経験

岐阜大・医・運動器外科
岩井智守男，宮本　敬，児玉博隆，大野貴敏，
細江英夫，清水克時
岐阜中央病院・整形外科
西本博文，青木隆明

症例1。8歳，女児。誘因なく頸部痛・斜頸を認め3回の Glisson 牽引により整復され以後6ヶ月装具を装用した。再発は認めていない。

症例2。7歳，女児。誘因なく頸部痛・斜頸を認めた。Glisson 牽引では整復されず，20日間の Halo ring を用いた直達牽引，約3ヶ月の Halo vest 固定にて治療し得た。以後再発は認めていない。

症例3。10歳，女児。起床時に頸部痛・斜頸を認め，長期にわたる Glisson 牽引にてのも整復されず，Halo ring を装着し牽引をかけた上で Halo vest 固定を行った。Facet loking が残存し，回旋変形が22°と中等度であり，脊髄への圧迫がないことから整復は不要かつ危険と考え環軸椎 in-site 固定として McGraw 法に決定した。

同症例では回旋変形が残存しており，後頭骨環椎間の回旋の頸椎全体に与える影響については未知なこともあり，成長に伴う変化も考慮して今後慎重な経過観察を要すると考える。

結語　小児における環軸椎回旋位固定の難治例3例について臨床経過を報告した。

12. 後弯変形の著しい高齢者の腰椎に対し椎弓根スクリュウーシステムを用いた手術治療を施行した1例

揖斐総合病院
渡辺友純，熊澤愼志，酒井浩志
岐阜大・医・運動器外科
宮本　敬，清水克時

症例は79歳男性，主訴は著明な腰痛，右大腿外側の激痛であり，間欠性跛行は5mと著明に低下。腰痛 JOA は13点。正面像で L3/4で左凸の変性側弯を認め，側面像では，L4の後方辷り及び L4/5にて椎間板腔の消失を認めた。腰椎全体では flat back の状態であった。高齢である，著明な腰椎変形，著明な腰，下肢痛，保存的治療が無効，患者が QOL の改善を強く望む，がありこれらを